（第三種郵便物認可）

私たち青年の仲間は現地での救援活動に行けない人からもカンパを沢山集めて被災地へエールを送っています。連日、被災地の人が頑張れるのは、全国からの支援と住民同士の団結、自治体労働者の奮闘というパワーがあるからです。私たちは、地域住民と共に安全・安心な街づくりと人が大切にされる政治の実現に向けて先頭に立ってガンバリます。

自治労連青年部長
大河内　一

救援に立ち上がる青年たち

大阪府庁を出発する救援ライダー

阪神大震災の救援活動として、日本列島縦断反核ライダーのメンバーで連絡を取り合い「バイクで何か救援活動に参加でけへんかなぁ」「大阪から車で4時間かかるけどバイクやったら1時間ぐらいで現地に着くわ」「そうや反核ライダーのメンバーに呼びかけて被災地へ救援活動に行こう」ということになり、近畿ブロックを中心に1月28日、29日の2日間を第1次救援行動として緊急提起し、大阪、京都、和歌山、滋賀から男女30名のライダーが参加した。

朝10時に西宮の兵庫自治労連に集合し自治労連本部の後藤田組織局長から現地状況報告を受け、交通事情の悪い西宮市山手地区に出向き被災者への実態調査・広報活動や神戸市全域の避難場所や被災地をバイクでまわり、実態把握を行った。

現地では、震災の恐ろしい現状に直面しながらの救援ライダー活動に、「新聞やマスコミで報道している状況と現場は大きな違いがある」「被災者のほとんどが市役所からの情報が途絶えている」などライダーから感想が出され、各駅頭での市の災害公報を配布するなど被災者の要望に応えた救援ライダー活動を引き続き展開しようと頑張っている。

行った、頑張った、そして考えた

大船渡市職　橋本　邦彦

私たちの住む大船渡市は、過去にチリ地震津波など大きな災害に見舞われながらも全国からの支援で復興してきた歴史があり、他人事とは思えず救援活動に志願しました。

芦屋市役所は本館の基礎部分が崩壊し、使用禁止の状況にあり、災害対策本部は別館へ設置して対応するなど現場での混乱はいまだに続いていました。仮に今回の地震で、真っ先に市役所や消防署などの緊急対応施設が全壊などしていたらと思うと背筋が寒い思いになります。

今回の救援ボランティア活動での貴重な体験を基に今後の大船渡市の防災体制の在り方に一石を投じたいと思います。

三浦市職労　下里　純也

我々が見たものは、日常生活とはかけ離れた、まさに地獄絵画さながらの惨たんたる光景でした。木造・RC造り問わず建物は倒壊、損壊が激しく、道路も至る箇所にひび割れが生じ、被災者の表情には希望の色など見られない状況でした。

今回の規模の地震が関東を襲ったとしたら、三浦市のように古い家屋が軒を連ねている町並などは、或いは全滅…被災者は県内では数万人に及び倒壊建物は数十万世帯、水道、電気等のライフラインも復旧できるかどうか…。今こそ我々行政マンが率先して一から見直す機会だと思います。

静岡市労連　青池　則男

現地では、食料物資の配送を行ないましたが、実際仕事をして感じたのは、自治体の災害時における機能がスムーズに働いておらず、不満を感じている市民がとても多いということです。一般職員の中にも不満はあり、特に青年層の中では、上からの指示が不適格で「どうしたらいいのか分からない」「もっと合理的な方法があるのでは」というような声が多く聞かれました。

そういった意味では、災害時に、市民の声にスムーズに対応できるような市役所内の緊急な体制づくり、市民、職員間の民主的な討議が普段から必要になると思います。特に静岡市に於いては明日は我が身の状況なので、早急に体制づくりが求められるとともに、将来、市役所内の重要部門を担っていく青年にとっても重要になってきます。

豊橋市職労　山本　誠二

息をのむような家屋の倒壊、あふれる物資輸送車、暗くうつむきかげんの人々…西ノ宮市でまず私の目に飛び込んできたものは、そんな光景でした。報道で知ることの出来る様々な情報よりも、本当にそれは恐ろしく悲惨だったのです。そして人々の生活といえば、水とプライバシーの無い暮らし…もう何もかも失ってしまい、生きる気力すら湧いてこないのも、至極当然のような気にさせられてしまいました。

一体誰に罪があるのでしょう。これを今後に生かせる教訓とし、将来の都市計画を見直していく事こそ大切ではないかと私は考えています。

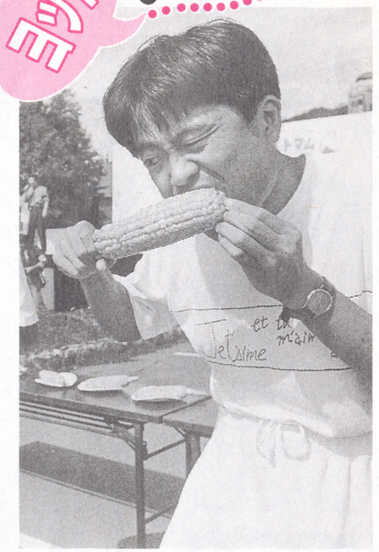
そうは言っても本当に悲しい…。私もなんとか力になりたい。早く兵庫の人々が明るい笑顔を取り戻し、あの憧れの街の輝きをもう一度見せてほしいと思っています。

ガンバレー兵庫。

笠岡市職労　青年部

笠岡市職労ボランティア隊第2班として神戸市中央区の北野小学校に行きました。震災から20日余りが過ぎ神戸の町は復興に向かって動き出している。しかし、避難者は依然パンとおにぎりのみという単調な食事と寒さで身体的にも精神的にもぐったりという感じでした。その中でもボランティアの人々は日々起こる新たな難問に本気で取り組み、避難所の人々のために最善の方策を考え、話し合い、行動する。彼らは今「生きている」ということをひしひしと実感しているのではないか。僕たちも「生きている」ということを素直に感謝し、日々の生活に真摯な態度で立ち向かっていかなければならないと強く感じさせられました。

ヨッ！ひかりもの



写真のアナタ！組合名、氏名、近況をそえて自治労連本部青年部までお便りください。図書券進呈。

君の要求・怒り・思いを川柳にしよう！

青年部第3回
春闘川柳コンクール 開催

応募先

〒112 東京都文京区大塚4－10－7
自治労連会館内
青年部「川柳係」まで。
☎03－5978－3580
大河内

様式は問いませんので、作品を書いて送ってください。

一人でいくつでも結構です。

作者の名前・職場連絡先を必ず明記してください。

締切り

3月末日

審査の結果、最優秀作品（1名）に図書券3000円分、優秀作品（若干名）に図書券1000円分を差し上げるほか、「自治体の仲間」紙上で発表します。